

エリヤは自分の外套を

列王記上 19 : 15 - 16、19 - 21



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年6月30日
聖霊降臨後第3主日

奈良基督教会にて

紀元前9世紀、イスラエル王国は、表面から見ればそれなりに安定していました。アハブ王はフェニキアと同盟を結び、また南の兄弟国ユダとも提携政策を取って、外交的にも軍事的にも、また内政の上でも手腕を発揮しているかに見えました。

しかし大きな問題が二つありました。ひとは干ばつが続いたことです。雨が降らない。農業は大打撃を受けました。そしてもっと深い社会の病は、精神的拠り所が失われている、ということでした。イスラエルの国の土台は、神への信仰にありました。どのような危機があろうとも、主なる神がわたしたちを守られる。この神に真実を尽くして歩もう。この精神が生きていけば困難は乗り越えていけるのです。

しかしアハブ王の時代、この精神が衰えてしまったのです。礼拝は行われています。しかし神へのまごころがない。礼拝で神に出会うということが起こらない。生きた神の言葉が聞かれない。神さまよりも自分の損得のほうを大事にしている。特に貪欲な人々が自分の富を拡大するために、罪のない人の財産と命を奪うようなことがまかりとおっている。

神から離れたよこしまな時代、信仰の情熱の失せた時代。そのような時代の中で、国と王と民衆を神さまのもとに帰らせようと奮闘したのが、預言者エリヤでした。彼の命がけの労苦と戦いは、旧約聖書・列王記上第17章以下に記されています。

しかしエリヤは次第に年老いていました。自分の後のことが心配です。後継者を得ることはできないだろうか。神さまのために自分と労苦を共にしてくれる者、そしてやがて自分が世を去った後も、神の言葉を人々に伝える責任を負ってくれる者。そのような者を得ることができればどれほどよいでしょうか。

しかし現実にはイスラエルの王家から彼は命を狙われ、逃亡したものの、疲れ果ててしまい、ついに死ぬことを神に求めたのでした。しかし天使に励まされて遠くホレブの山に至り、ただひとり神に祈って過ごします。やがて神がエリヤに語りかけられました。

「ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。」

列王記上 19:16

ここで気づかせられるのですが、神は、神に背き民を虐げる王朝を転覆される、滅ぼされる、ということです。この社会に、この国に正義が行われているかどうか、弱い立場の人びとが虐げられていないかどうか。これが神の関心です。神の関心事にわたしたちが無関心であってよいはずはありません。これは今日のことです。

神は続いてこう言われます。

「またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。」

エリヤが自分の後継者を見出すことができず、もう諦めていたときに、神はその人を見出しておられました。ヨルダン川の近くのアベル・メホラに住むシャファトの子エリシャ——彼をあなたの後継者としなさい。神さまはそうエリヤに告げられたのです。エリヤは遠く来た道を帰って行きます。

エリヤはアベル・メホラの村に行き、エリシャを見つけました。見ると、エリシャは ^{くびき}12 軛 の牛を前に行かせて、畑を耕しているところでした。12 軛というのは 24 頭の牛です。かなり大きな規模の農業をやっていたようです。

エリヤはエリシャに近づき、通り過ぎざまに自分の外套をエリシャに投げかけました。「わたしはあなたをわたしの後継者とする。あなたは神さまのためにわたしと一緒に働く者。今わたしはあなたを任命した。」——それが、外套をエリシャに投げかけたことの意味でした。

エリシャはその意味を理解しました。エリシャは牛を捨ててエリヤを追って来たのです。エリシャは言いました。

「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。
それからあなたに従います。」列王記上 19:20

エリヤは待ちました。長く待ちました。日は暮れ、夜になりました。夜を明かし、朝を迎えました。エリシャはほんとうに

来るのでしょうか。

神が示してくださった人なのだから、必ず来る、とエリヤは信じたい。しかし、本人のエリシャがそのつもりになったとしても、両親が反対しているのではないのでしょうか。富裕な農家の跡取り息子です。安定した生活を捨てて、のたれ死にするかもしれないような預言者の道を両親が許すのでしょうか。仮に両親が強く反対しなかったとしても、エリヤ自身が老いた両親を後に残して家を出る決意ができるのでしょうか。自分には事情があるので、一緒に行けません、ということになるかもしれない。そう思うとエリヤはとても心配になります。

エリヤはエリシャを待ちながら祈りました。祈って待ちました。エリシャが神さまのために決意してくれることを。聖霊がエリシャの心を動かしてくださることを。

エリヤは単に自分自身のために祈ったわけではありません。よこしまで真実と信仰を失ったこの時代のために、心の拠り所を失っている多くの人々のために、神の国が実現するように。神のために祈り、社会と人々のために祈り、そしてエリシャの人生のために祈ったのです。神のためにエリシャの魂が燃えてほしい。エリヤ自らが願いと決意をもって立ち上がってほしい。聖霊よ、神の霊よ、エリシャの魂を捕らえてください。

ふと見ると、遠くにエリシャの姿がありました。エリヤの目は見ました。エリシャは旅支度をしています。エリシャはほんとうに自分に従う用意をして戻って来てくれた。あのエリヤの外套を持って。エリヤはどれほどうれしかったことでしょう。

エリヤとエリシャからおよそ 2800 年が過ぎた今日、あの祈られたエリシャ、待たれたエリシャに当るのはだれでしょうか。それはわたしたちのこと、皆さんのことです。わたしたちにもいろいろ事情がある。けれどもわたしたちはエリシャと同じように家と仕事を全部捨てて来るようにとは必ずしも言われていません。

しかし大事なことは、わたしたちのために、皆さんのために、祈っておられる方がある、待っておられる方があるということです。

「わたしのところに来て、神の国のために協力者となってほしい、福音の宣教のために共に労する者となってほしい。」

わたしたちはイエスさまによって呼ばれている者です。わたしたちはイエスによって祈られている者です。喜んで、決意して、イエスさまと共に神さまのために働こう。曲がった時代、情熱なき時代に、人の救いのために情熱を注ぐ者となろう。

パウロはこう言いました。

「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているのです。」ガラテヤ 3:27

イエスさまがご自身の外套をわたしたちに着せてしまわれました。そのぬくもり、温かさの中に守られつつ、わたしたちもイエスさまとともに祈り、働くのです

。

祈りましょう

神さま、あなたは遠い昔、エリヤを、そしてエリシャを選び、大切な使命のために招かれました。エリヤはエリシャに外套を投げかけましたが、あなたはわたしたちにキリストという衣服を着せてくださいました。わたしたちもあなたから受けた愛と、救いを広げる使命を大切にして、主に従い行かせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン